

## 「ツイニ・トウトウ」小考

池田英喜

【キーワード】瞬間、過程、命題、話し手の気持ち

### 1. はじめに

日本語に限らず外国語の学習がある程度進んだ段階では、なんとなく違う感じがするがどう違うのかがわからないといった、いわゆる類義表現の使い分けが気になるものである。本稿では、ある事態の成立に大変な苦勞を要する、また長い時間がかかるといった話し手の気持ち・判断といったものを表すといわれる類義表現、ツイニとトウトウという2つの副詞についての小考を試みる。

### 2. 先行研究

たとえば以下の文では、ツイニを用いてもトウトウを用いてもほぼ同じ意味を表していると考えられる。しかし実際にはこの両者に文の中で出会ったときにはそこに何らかの異なるニュアンスを読みとっている感じがある。

(1) あいつも{ツイニ/トウトウ}父親か。

長嶋(1982)は、「ツイニは、トウトウに比べて、ある〈事態(状態)の実現の瞬間に注目する〉のに対し、トウトウは、〈事態(状態)が実現する過程に注目する〉と言えよう。さらに、トウトウには、いわば「紆余曲折を経て」といったニュアンスが伴う。」として次の例(注1)を挙げている。

(2) 労使の交渉が決裂してツイニストに突入した。

(3) 労使の交渉が決裂してトウトウストに突入した。

(4) 三浪の彼もツイニ難関を突破した。

(5) 三浪の彼もトウトウ難関を突破した。

日本語を母語とする人間にはなんとなくわかるが、母語話者以外に説明するときの説得力に欠ける。

また、森田(1977)の説明を受けて、大里(1986)は「「～ナイ」などの否定形式を伴った文にはツイニが出現するのが普通である。このツイニの代わりにトウトウを代用することはほとんど容認されない。」と、かなり強引とも言える説明を行っているが、これには異議を唱えざるを得ない。以下に大里の例文をそのまま引用する。

(6) もし平目が生きていたら、自分の今と同じように家族にかこまれてテレビを見、何げな

い会話をおかわしていたろうか。だが、あの時、自分と同じ年齢で戦死した奴。戦病死した奴にはそういう人生は遂に与えられなかった。

(7)世間が期待する通りになろうとする人は遂に自分を発見しないでしまうことが多い。  
(例文の下線はいずれも池田)

いずれの例文も下線部の「遂に」をトウトウに置き換えても特に不都合は感じられないと思うのだが。ちなみに、トウトウに置き換えた例は以下の通りである。

(8)もし平目が生きていたら、自分の今と同じように家族にかこまれてテレビを見、何げない会話をおかわしていたろうか。だが、あの時、自分と同じ年齢で戦死した奴。戦病死した奴にはそういう人生はトウトウ与えられなかった。

(9)世間が期待する通りになろうとする人はトウトウ自分を発見しないでしまうことが多い。

### 3. 考察

#### 3.1. ツイニ=サイゴニ

助詞の「ハ」は、ツイニとしか共起することはなく、トウトウとの共起は見られない。

(10)免疫の力を弱める免疫抑制物質を出したり、狙撃兵にあたるTリンパ球を作らせない仕組みも持っているらしい。手を替え品を替え、ついには免疫細胞との戦いに勝ち抜き、仲間を増やしていく。(AERA93年5月25日号)

(11)笑いはいつまでもおさまらず、次第に大きくなって、ついには少女の泣声を覆ってしまいました。(「壁—S・カルマ氏の犯罪」安部公房)

(12)悪い病気のように毒が毒をよび毒を産み、ついには重なりあい、密集して互いにひしめきあい、天も地も赤くなる。(「無明長夜」吉田知子)

これらの例に共通するのは、ツイニハが「最後には」に置き換えが可能だと言うことである。

(13)手を替え品を替え、サイゴニハ免疫細胞との戦いに勝ち抜き、仲間を増やしていく。

(14)笑いはいつまでもおさまらず、次第に大きくなって、サイゴニハ少女の泣声を覆ってしまいました。

(15)悪い病気のように毒が毒をよび毒を産み、サイゴニハ重なりあい、…

もし、ツイニハが常にサイゴニハに置き換えが可能であるならば、助詞「ハ」を除いたツイニがサイゴニと同義である可能性が見出せる。これが先行研究で森田(1977)、長嶋(1982)、大里(1986)がみな同様にツイニには<瞬間>の含意があるとする所以ではないのか。つまり、ある一連の事象が終了するであろうと思われる限界点を話し手が意識するときにツイニ(=サイゴニ)が用いられるのであり、その限界点に瞬間の含意があるのは当然だからである。

(16)ツイニ雨が降り出した。

(17)ツイニハ雨が降り出した。

たとえば夏の暑い日に、気温がどんどん高くなり、雲が発達し、空が暗くなって、最後に雨が降り出したとなれば、夕立が起こるまでの一連の事象の終了限界である雨の降り始めがまさにツイニによって強調されていると言えよう。もちろん実例にはツイニとツイニハがあり、一連の事象が終了する限界点であることを話し手がより強調したければ、おのずとツイニハが用いられ、そうでなければツイニを用いても、トウトウを用いてもかまわない。

また、ツイニはサイゴニと同義であると仮定すれば、この両者が同時に用いられることはないだろうという予測が成り立つが、はたして今のところはそのような例を発見できてはいない(注2)。まったく見つからないわけではないだろうが、(21)(23)のようにツイニの例にサイゴニを追加してみると違和感を覚える。トウトウに関してはもちろんこのような制限はなく、実例も容易に見つかる。

(18)たぶん、顔をごしごしこすったり、小鼻のわきをびくびくさせたり、とうとう最後にはこらえ切れずに、例のゲラゲラ笑いになったに相違ない……。 (「少年の橋」後藤紀一)

(19)あの冬は仕事がなく、おまけに病気で、とうとう最後にはパンを買うお金もなくなってね、… (「寅さん」)

(20)…小鼻のわきをびくびくさせたり、ツイニハこらえきれずに、…

(21)?…小鼻のわきをびくびくさせたり、ツイニサイゴニハこらえきれずに、…

(22)あの冬は仕事がなく、おまけに病気で、ツイニハパンを買うお金もなくなってね

(23)?あの冬は仕事がなく、おまけに病気で、ツイニサイゴニハパンを買うお金もなくなってね

### 3.2. ~テシマウとの共起

ツイニ・トウトウはともに~テシマウと共起しやすいことが、ヤット・ヨウヤクとの比較において大里(1986)では述べられている。ただし、このいずれが~テシマウとより共起しやすいかといった記述はない。本稿では、限られた例文の中からではあるが、~テシマウとの共起について一定の傾向があるように思われるので一応記述しておく。

もしもツイニとトウトウに取り立てて大きな意味の違いがないのであれば、両者ほぼ同じ割合で、~テシマウと共起して出現するはずである。以下の表は~テシマウとの共起の割合をツイニとトウトウで比較したものである。これを見ればトウトウの方が明らかに~テシマウと共起しやすいことがわかる。

	総出現数：a	~テシマウとの共起：b	b/a
ツイニ	123例	10例	8%
トウトウ	229例	58例	25%

前言のとおりデータの数が少ないので、当然これだけでは断言できないが、両者を選び出したテキストには同じものを使用しており、8%と25%という比率の差は明らかにツイニ・トウトウが持つ意味の差を反映していると思われる。よってこれらが単に例えば文体差というものから生じたとは考えにくい。

～テシマウ自体はある事象が起こったとき、それが残念であるとか、しなければよかったと後悔しているとかいう話し手の気持ちを表している表現であることから、トウトウはこういった話しての気持ちとより結びつきやすいと言えよう。

#### 4. まとめ

以上の考察をまとめると、以下のようになる。

ツイニ :

最後にという意味で用いられることが多い。そのため、ツイニサイゴニといった使い方をすることはあまりない。最後という意味を強調する場合はツイニハとなり、助詞の「ハ」をともなって出現することができる。最後であるというのは、気持ちよりも事実である。よって、ツイニはモーダルな表現でありながらも、どちらかと言えば命題そのものとの結びつきが強い。

トウトウ:

最後という意味は特にもたない。～テシマウと共起することが比較的多く、その場合は残念だとか、しなければよかったという後悔の気持ちを強調することになる。その点において、ツイニが命題との結びつきが比較的強い表現であるのに対して、話し手の気持ちとより結びついた表現だと言える。

データが増えればもう少し違った振る舞いを見せるかもしれないが、現時点では以上のようにまとめられよう。少なくともこの両者について、瞬間や過程といった抽象的な説明よりは現実的な説明がこれにより可能になると思われる。

注1: 例文(2)～(5)はすべて長嶋(1982)から引用。

注2: 手元にある実例の数はトウトウ229例、ツイニ123例とまだ数が少ないので、これだけで結論を出すのはもちろん危険ではあるが、根拠を出さずにただニュアンスが違おうと説明するよりは説得力があると考えられる。

#### 【利用したテキストデータ】

『芥川全集第第一巻～十三巻、第十五巻』 文藝春秋社

『アエラ』1993年5月25日号 朝日新聞社

『シナリオ「寅さん」シリーズ』

#### 【参考文献】

大里 泰弘(1986)「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『九大言語学研究室報告7』九州大学文学部言語学研究室編

長嶋 善郎(1982)「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味3—辞書に書いてないこと』國廣 哲彌編 平凡社

仁田 義雄(1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』vol.12(2-10)  
森田 良行(1977)『基礎日本語—意味と使い方』角川書店

‘tsuini’ and ‘toutou’

According to my statistical research, 'tsuini' has more effect on the sentence proposition itself, where as 'toutou' has more effect on the speaker's attitude towards the proposition. Also 'tsuini' resembles 'saigoni'(in the end) when particularly used with the particle 'wa', but 'toutou' cannot be used with 'wa' and does not tend to be replaced with 'saigoni'.